

未来バンク

すべての人がおカネに意志を持たせる社会にする

ニュースレター 第3号 2020 JAN

【コンテンツ】

1. 田中優 2. 田中悠輝 3. 木村瑞穂 4. 奥田裕之 5. 総会開催報告

特集：映画「インディペンデントリビング」公開（田中悠輝初監督作品）

田中 優 理事長

Tanaka Yū

生きる作法

ドキュメンタリー

「INDEPENDENT LIVING」



私の三男、このバンクの理事の一人に参加してくれている田中悠輝くんが作った初めての監督作品だ。観てもらうのが一番いい。ぼくは観ていて感動してしまった。映画の中で彼の姿は出てこないし、言葉が聞こえるのもほんの1〜2か所だ。まるで姿を消している。おかげで集中してドキュメンタリーの中にどっぷり浸ることができた。

ここではそんな彼と、その親であるぼくとの関係を書いてみたい。彼は男ばかりの三人兄弟の三男として生まれた。ぼくにとっては三人目の子どもで、可愛くて仕方なかった。長男たちは「悠輝だけは可愛がられていた」という。そんなことはない。三人とも可愛がっていたのだが、三人目だからなれていて、叱ったりしなかっただけのことだ。

子どもたちはぼくよりはるかに素晴らしい子に育った。長男は株式会社「天然住宅」の経営者になってくれていて、次男は弁護士になって「天然住宅」の顧問弁護士も引き受けてくれている。長男の竜二は、子どものころから子ども好きで下の子を可愛がっていた。そして長男は運動神経がよかった。小学生時代にサッカーにはまって、今なお時々参加するようだ。ところが子ども時代に運動神経が良いとヒーローになりやすい。

次男は運動はいまいちなのに、長男のようにしたかった。加えて次男は喘息持ちだった。それを見て、ある日風呂に入りながら次男と話した。長男のようにしたいかもしれないが、残念ながら同じように努力したとしても長男のようににはなれないだろ

う。だから何でもいいから長男とは違う、好きなことをした方がいいと。次男はわかってきて、「自分は勉強が好きだから勉強したい」と言った。

次男はとにかく持続して何かを続けることができた。体のためにと始めたマラソンは、彼が喘息を克服してからも続いて、今なお時々走るらしい。そして彼は高校で美術部に入り、絵も描いたがさらに大学では「キュレーター(学芸員)」の資格も取った。文科系に多趣味で、何か本を読みたくなると兄弟たちは彼にいろいろアドバイスをもらっている。長男は今では読書好きで、子育てに忙しい傍ら、次男にどの本がいいかと聞いている。

そんな中に三男は育った。運動神経は長男並みにあるのだが、運動部のノリが嫌いで参加しなかった。「先輩・後輩関係」が我慢ならないのだ。家庭内でそんな格差がないのに、なんでたかが学校内で後輩だと、格下の扱いをされなきゃいけないのか、それがばかばかしくて参加しなかった。そんな中、彼は子どものころからテレビゲームなどに長けていた。何となく兄弟で一番できたのだ。それはそのまま機械操作につながっていく。家庭内でパソコンのことについては一番詳しく、カメラや携帯、障害者関連の社会制度にも一番詳しい。そうしていつの間にか兄弟内での役割分担と、特技の分担ができていった。

しかし兄弟内で競ったり争ったりすることがない。それぞれがそれぞれなりに楽しんでいて、困ったときには一番できそうなヤツに頼むのだ。そして成人してからは、三人で飲んだりするのが好きになった。最初にもらった給料で長男が次男・三男を誘い、あれこれ話したようだ。これが楽しいのだ。ぼく自身も親ではあるが、ときどき参加させてもらっている。私は長男の上にいる長男のようなものだ。

長男は子どもの頃から子ども好きで、下の子を楽しませるのが好きだった。そのおかげで次男三男とも伸び伸びと暮らしていた。もう一つ長男が大好きなのが、自分の親しい友人を親しい人につなげることだった。次男の大学の友人は長男と高校で同級生だったヤツだし、三男もまた長男の友人と絡んでいる。それだけではない。親である私の親しい友人だったはずの鎌仲ひとみさんが三男のドキュメン

タリーフィルムの作成に関わっているし、次男が司法修習生として行った佐賀県で世話になったのは、佐賀にいる医師の友人が紹介してくれた法律事務所だった。ぼくの子だからと、原発問題を割り当てられて困ったりしていたようだが。

でもぼくの友人を鎌仲さんのフィルムのカatalogの文章に紹介した時には、その友人が大人風を吹かせたことが、三男の逆鱗に触れたらしい。しかしその友人は「ぼく自身がそうされるのが大嫌いなのにすまないことをした」と、三人で飲んだ時に本気で三男に謝っていた。そんなに気にしなくていいのと思うのだが、その友人は自分の誠実さが傷ついたかのように謝っていた。

もともと友人も、毎年一緒に夏にキャンプに行く仲間だ。三男はまだ歩けない頃から参加していて、今でも毎年一緒に飲んでいる関係だ。そんな仲間だから、気軽な友人なのだと思う。そう、ぼくの仲間もまたそのグループに参加している。

ぼくは三男を生意気だとは思いますが、その存在が好きだし信頼している。いつもいろいろ調べて、それが何故なのかを考えている。兄弟は三人とも、とても親切だ。相手の内側から見て、それがどう感じられるのかを見つめている。障害のある親戚がいて、差別意識を持つ前に、そこにいるのが当然だったせいかもしれない。その三男だから、このフィルムを撮れたのだと思う。彼の目からは楽しい友人たちの一人として、たまたま障害を持った人たちもいる。常日頃そうであるように、彼は一緒に

楽しんでいる。一方で彼らを傷つけないように、利用しないようにしながら撮影している。

その結果、フィルムは自然で、彼ら自身が「自立生活運動」を紹介したかのように撮れている。もちろん「自立生活運動」に参加してくれている「ヘルパー」の人たちを含めて、皆が互いを支えているからだろう。そのことも自然に理解でき、フィルムを観るだけで人と関係を作る上での第一歩となるだろう。手をかけすぎず、自主性を大切にしながら生活を支えていく。これは言葉でいうよりずっと難しい。手出しして支えて助ける方が簡単だからだ。でもそれでは「自立」にならない。できないことがある人が必要な時に「助けて」と言えることと、助けが必要としている人がいるならば、理屈なしに手を貸すことは、なかなか自然にできないように育てられてきたからだ。

その一歩目は、上下左右もなくごく普通に人と人間関係を結ぶことだと思う。三男は大学卒業後すぐにホームレス支援の活動に参加していた。片目で現実を見ながら、片目でその人の暮らしを喜んで見ていた。シビアな現実を見る目と、もう一方で彼ら自身の楽しみ方を感じていた。その彼だから撮れたフィルムだと思う。ドキュメンタリーを観てほしい。そして作品に口出してほしいと思う。まだ不十分なところもあると思うので。

しかし私にはこの上なく感動的なフィルムだった。自立生活運動とは、誰にも必要な生きる作法だと思う。それと同時に三男の悠輝くんという人が、こうして育ったからこそ、偏りのない目で撮れたのだと思う。

障害者が自立生活を選ぶ

障害当事者が運営する自立生活センター。

そこは“生きづらさ”を抱えた人が“自分らしさ”を取り戻す場所

『インディペンデントリビング』

■作品概要

物語の舞台は大阪にある自立生活センター。ここは障害当事者が運営をし、日常的に手助けを必要とする人が、一人で暮らせるよう支援をしている。先天的なものだけでなく、病気や事故などにより様々な障害を抱えながら、家族の元や施設ではなく、自立生活を希望する人たち。自由と引き換えに、リスクや責任を負うことになる自立生活は、彼らにとってまさに“命がけ”のチャレンジだ。家族との衝突、介助者とのコミュニケーションなど課題も多く、時に失敗することもある。しかし、自ら決断し、行動することで彼らはささやかに、確実に変化をしていく。

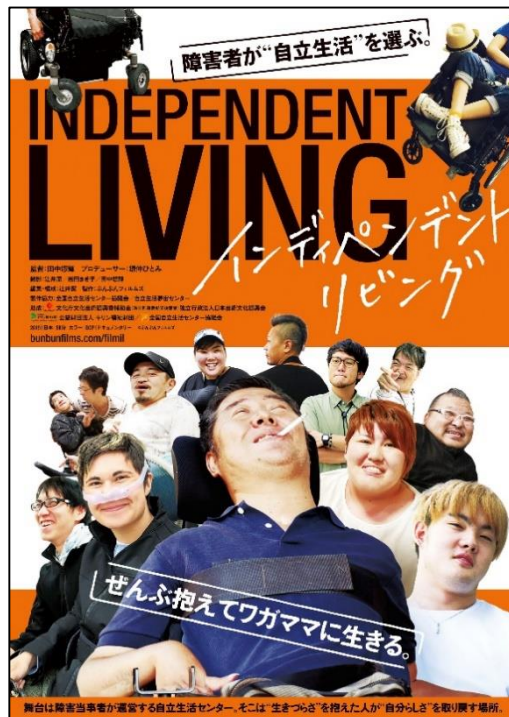
2019年／日本／98分／カラー／DCP／ドキュメンタリー ©ふんぶんフィルムズ

監督：田中悠輝

<https://bunbunfilms.com/filmil>

2020年1月11日(土)より 大阪・第七藝術劇場に先行上映決定！

3月14日(土)よりユーロスペースほか 全国順次ロードショー



田中悠輝

Tanaka Yūki

映画『インディペンデントリビング』の劇場公開に向けて

田中優の三男の田中悠輝です。映画監督をしています。いよいよ2020年の1月11日(土)より大阪第七藝術劇場にて私の初監督長編ドキュメンタリー映画、『インディペンデントリビング』が封切りになります。続いて、東京では3月14日(土)より渋谷にあるユーロスペースにて劇場公開されます。通例では、映画の封切りは東京が最初になりますが、今回は映画の舞台が大阪ということもあり、大阪先行で劇場公開の運びとなりました。

ここで私が映画製作に至った経緯とその思いをお伝えしたいと思います。

誰かを必要とし

誰かに必要とされる関係が
生きる力に

「ありがとう。遺影にするわ。」

北九州で生活困窮者の支援をしていた頃、元ホームレスのおじちゃんに言ってもらった言葉だ。当時、私はカメラをかじり出した頃で、何の気なしに写真を撮っていた。よく撮れたと思ったのでおじちゃんに見せたところ、いたく喜んでくれたのだ。“遺影にする”は、その界限のおじちゃん達の言う、冗談とも本気ともとれない褒め言葉

なのだが、よくよく考えてみるとすごい言葉だ。おじちゃんが生きた証しである遺影に私の写真を使うよと言ってもらってしまったのだから。けれどもその時の私はあまりその言葉を深くは受けとめず、すっかり気をよくして、東京に戻ってからカメラを持ち続けていた。

大学を出てから、九州で2年間野宿者支援の仕事に関わり、東京に戻った私は、とあるイベントで障害当事者の今村登さんに出会う。「俺の介助者をやらないか？」と誘われ、そのまま今村さんの関わるSTEPえどがわの介助ヘルパーとして働くようになった。

同じころ、その今村さんが映画の上映会を主催した際に、本作のプロデューサーを務める鎌仲ひとみ監督に会い、そのまま「ふんふんフィルムズ」の映像制作の仕事に関わりはじめた。

いっぽうで、生活困窮者の支援にも関わり続けたいと東京の老舗NPO、自立生活サポートセンター・もやいで働き始めた。

映像を撮った人には 「責任」がある

三足のわらじを履く忙しい日々の中で、撮りためていた映像を映画にしてみないか、という話が持ち上がる。転機となったのは、2018年に応募していた文化庁の助成金が決まったことだ。翌年春には映画を完成させないといけない。映画制作は初めて、もちろん監督業も初めてだ。そんな短期間で実現できるとはとても思えなかった。

そんなとき、プロデューサーの鎌仲さんから喝が入った。「映像を撮った人には責任がある。」と。映像は、撮られる人はもちろん、その場に繋いでくださった人たちの協力なしには撮影することはできない。だから撮ってきたあなたには責任があるんだ、と。

もう一人、映画をつくろうと私に決心させた人がいる。本作にも登場する平下耕三さんだ。JIL（全国自立生活センター協議会）という組織の代表でありながら、なにかというボケてみたり、冗談を言ったりしている“おもしろい”障害者だ。取材で平下さんのセンターを訪れていた私が、撮りためていた映像が、映画になるかもしれないんです、と話すと、いつもニヤニヤ冗談ばかり言っている平下さんが真面目な顔で「悠輝ならできる。悠輝に撮ってほしいわ。」と

言ったのだ。これはなんとか作りきろう、そう腹を決めた。

人が本来持つ 「生きる力」を取り戻す

この映画を撮ろうと思ったのは、何よりも“自立生活”（Independent Living）とその運動がもつ可能性をたくさんの人に知ってほしいという思いがあったからだ。

アメリカにルーツを持つ自立生活運動は、多分に黒人の公民権運動の影響を受けながら誕生し、今日アメリカの運動の現場では、障害者のみならず、不法移民や性的マイノリティ、ホームレスなど、広範に“生きづらさ”を抱える人たちの支援にあたっている。家庭や施設といった閉じた場所に光をあて、外の世界へ連れ出す。仲間の元へ案内して、本来持っていた力を引き出す。そして自分の本当に求めている暮らしを取り戻していく。もちろん、実際にはそんなに美しい話ばかりではない。けれどもその理念と理想を持って、多くの人たちが活動を続けている。

そしてもうひとつ伝えたかったことがある。自立生活運動の現場で力を得ていくのは障害者ばかりではない、ということだ。同じように“生きづらさ”を抱えて生きる介助者もまた、力を得て生きる力を取り戻していくのだ。

「自分の命が無価値だと思ってしまったら、他の人の命も無価値だって思ってしまう」。

これは、秋葉原無差別殺傷事件について話していたとき友人が口にした言葉だ。彼は「あれはぼくだったかもしれない」と話した。私もまた「彼は、自分だったかもしれない」と思った。私自身もまた、「おまえは生き

ている価値があるのか」という問いにさらされ、毒されていたのだと感じた。

迷いや恐れを超えて、 他者に出会い続ける

「セルフネグレクト」という言葉がある。これは、自分のことなんてどうだっていい、自分なんてなんの価値もない、と自らを放任し、ないがしろにしてしまうことを指す。格差と貧困が広がる現代社会で、生きていくだけでせいっぱい。そんな中で何の目標も夢も見つけれず、自分に価値がないと思込み、生きることに無気力になる。私に関わってきた野宿者・生活困窮者の中にも多くそんな人たちがいた。

哲学者の内山節は「関係が価値を生みだす」と語り、「人間の価値はある関係の中で成立し、人間的な価値は関係の変容とともに非合理に変化し続ける」と述べている。その不安定な関係が“生きづらさ”を生み、関係の消失が人間の価値を見失わせているのではないかと感じる。

「人間は必要とされることを必要とする」というのは心理学者エリク・H・エリクソンの言葉だが、本作を通して出会った、自立生活を目指す障害当事者や介助者たちは、お互いに必要とし、必要とされ、満たし合う関係が垣間見える。もちろん、内山節の言うように、その関係はうつろい、常に変容していくし、パターンリズムや支配、共依存など、関係性の落とし穴はいつもすぐそばにある。けれども、その迷いや恐れを超えて、他者に出会い、関係を築いていく姿がいつもそこにはあった。私はそんな彼らの日々の証し、「生きる証」としてこの映画を作った。

木村 瑞穂

Kimura Mizuho

「仮想通貨、その後」

■仮想通貨は、今

かつて大きな話題を呼んだ「仮想通貨」、最近あまり話題にならなくなったが、今はどうなっているのだろうか。また、facebookが仮想通貨「リブラ」を発行するというのが話題になっているが、本当に発行されるのだろうか。

まずは気になるのは値段である。最高値で200万円をつけたビットコインはその後下がり続けたが、50万円で底値を打ち、2019年6月には140万円まで戻した。その後再び下がり、現在は90万円前後の価格をつけている。

仮想通貨は投機のツールとして注目され、バブルを形成したが、本質は別のところにある。

(1)インターネットならではの新たな認証技術を導入することにより、どのアカウントがどれだけ通貨を持っているかを記載した帳簿が開示されているにも関わらず、改ざんできないようにしたこと(ブロックチェーン)。

(2)所有権の移転と資金決済を同時にできるようにしたこと。このトランザクションは帳簿の認証と同時に自動的に行われ、人手を介する必要がないこと(スマートコントラクト)。

(3)国家から通貨発行の独占権を奪うこと。こうした観点からの研究開発は今でも着実に広がっている。

ビットコインの取引は今でも投機が中心で、資金決済での利用は増えていない。一方で、

ビットコインのATMは米国を中心に世界で6000台と急速に増えている。ビットコインアドレスのQRコードをスマホで表示し、ATMにかざすことでドルを入金したり、引出したりすることができる。日本にも一時期六本木に設置されていたが、残念ながら今は設置されていない。



https://kuchikomi0.com/virtualmoney/bitcoin_atm_bitcoin/

■有価証券化する仮想通貨

企業が株式の代わりに仮想通貨を発行して資金調達をするという動きは加速している。詐欺まがいの事件も発生したため取締りが厳しくなり、米国では有価証券として認可されるようになっていく。資金決済のツールではなく、投機のツールとして使われることの多い現状からすれば、その方が適切かもしれない。

日本でも金融庁は、「仮想通貨」という名称を「暗号資産」に変更する方針を打ち出している。

■仮想通貨化する国家通貨

仮想通貨といえばビットコインが最も有名だが、実は最も取

引量の多い仮想通貨はビットコインではない。「テザー」と呼ばれる仮想通貨だ。これは米ドルを担保として発行され、価格は米ドルにリンクしている。

テザーは現状では主として仮想通貨の取引に使われている。仮想通貨が下がりそうになった時の一時的な退避先として使われているようだ。本物の米ドルに交換するよりも仮想通貨同士の交換の方が銀行が介在しない分コストが安いのだ。ただし、現状ではテザーは商品購入の資金決済には使うことができない。今後はそうした動きも出てくるかも知れない。

これに追随しようとする動きがある。facebookだ。

facebookが計画している仮想通貨リブラは世界中の通貨を担保にして発行するものだ。例えば、ドルが50%、ユーロが30%、円が20%と組み合わせ、リブラの価値もその比率で各国の通貨に連動させる。facebookの中での送金や資金決済に使えるようにしようという計画だ。

リブラの利用が広がればfacebookの外でも使えるようになるだろう。各国の通貨当局はそれを恐れて一斉に反対している。リブラが世界中で使われるようになり、商品の値段がリブラで決まるようになれば、国家の持つ通貨主権が実質的に奪われてしまうからだ。

各国の通貨当局はfacebookの動きに対して単に反対しているだけではない。国家として仮想通貨を発行することを目論んでいるところもある。中国、エストニア、スウェーデンなどが検討中であることを明言している。

例えば、中国の通貨「元」が仮想通貨として世界中で使われるようになれば、米ドルが基軸通貨としての地位を失う可能性もあるため、世界中から注目されている。国際貿易のほとんどは基軸通貨の米ドルで行われている。そのため、米国はドル紙幣を印刷すれば外国からいくらでも物を買うことができる。米ドルが基軸通貨の地位を失えば米国経済は破綻する可能性が高いのだ。

■日本円は仮想通貨になるか

それでは日本円が仮想通貨になる可能性はあるのだろうか。

実は既に存在すると言ったら驚くかも知れない。リップルという仮想通貨を利用した国際送金システムは既に稼働している。リップルは銀行間の国際送金システムの中で利用されているが、その中では日本円はJPYという仮想通貨に交換した上で海外に送られている。あくまで銀行間のネットワークの中だけはあるが、既に存在する。SBIの子会社であるSBIレミットはリップルを使った国際送金を既に始めている。

しかし、発想を変えてみれば日本には既に日本円にリンクし

た仮想通貨は存在する。Tポイントや楽天ポイントなどは1ポイント＝1円で商品の購入に利用できる。ただし、これらのポイントによる決済は最終的には銀行で資金決済されている。それをやめればよいのだ。ポイントをポイントのまま流通させ、銀行を通さなければよい。名称もポイントなどと呼ばず、「YEN」とすればよい。そして海外でも使えるようにするのだ。送金手数料や決済手数料は大幅に下がるはずだ。

国家間で仮想通貨戦争が始まるのは、意外と近い将来かも知れない。

奥田 裕之

Okuda Hiroyuki

休眠預金制度が、市民社会を壊すかもしれない

2019年11月29日に、ようやく休眠預金等活用法に基づく資金分配団体が公表された。これから日本各地の資金分配団体それぞれが資金を活用する団体を公募することになる。休眠預金制度は成立する前からいろいろな課題があったが、動き始めた今も大きな問題点を含んでいる。ここでは今後予測されるリスクについて少し大きな枠組みから考えてみたい。

■休眠預金制度と、指定活用団体決定までの市民側の動き

2016年12月、長い間（10年以上）出し入れが行われていない「休眠預金(休眠口座)」を、国民のための社会事業＝民間の

公益活動を通じ有効に活用していくための休眠預金等活用法が成立した。この制度の対象となる「優先的に解決する社会の諸課題」は下記の3点になる。

- ①子ども及び若者の支援に係る活動
- ②日常生活または社会生活を営む上での困難を有する者の支援に関する活動
- ③地域社会における活力の低下その他の社会的に困難な状況に直面している地域の支援に関する活動

毎年700億円を活用することが可能なこの制度には当初から多様な思惑がからみ、「社会的投資」の文脈をNPOセクターに大々的に導入することのリスクや、制度設計時の審議プロセス

の不明瞭さなど、課題が大きかった。

そこで制度設計を行っていた「休眠預金等活用審議会」と制度の元締めとなる「指定活用団体」1団体の選定に対して、筆者等が2018年度に「現場視点で休眠預金を考える会」を形成してアドボカシー活動を行った。その結果、「先駆的で革新的な団体」を主な対象とした制度から、全国の「草の根団体」を中心とした制度に性質が変わるなど、一定の成果を得ることはできた。

*指定活用団体が決定した時期まで行ったアドボカシー活動については、こちらを参照

https://peraichi.com/landing_pages/view/kyuminnyokinppo

■指定活用団体決定後の混乱 と事業スタート

制度の根幹となる「休眠預金等交付金に係る資金の活用に関する基本方針」は、内容が曖昧なまま内閣総理大臣決定されたため、指定活用団体となった「(社)日本民間公益活動連携機構(JANPIA)」が2019年度に制度の多くの部分をほぼゼロベースから作ることとなった。

休眠預金は2019年から毎年1月1日に発生することになっているので、2019年度内に資金を循環させないとすぐ次の年の分が発生してしまう。それにもかかわらず実際に資金を現場へ提供する資金分配団体の決定は、当初予定の9月から11月下旬とおよそ3ヶ月も遅れている。

理由については不明だが、自由な「草の根活動」を重視しようとする考え方と、制度当初の「社会的投資」を重視する考え方が本質的に噛み合わないことが、ひとつの理由ではないかと考えている。「休眠預金の資金を呼び水にして市場から社会的投資の資金を導入し、ソーシャルセクターを発展させる」ことは一見正しそうだが、市場と異質な価値を持つ草の根NPOとは相容れない部分もある。それを理解していない内外の人々の影響力が、再び強くなってきているのかもしれない。

ともあれ、多くの人々のさまざまな期待と野望をもとに制度は動き始めた。2019年度は助成事業を対象に、「草の根活動支援事業全国ブロック」で7、「同、地域ブロック」で8、「新規企画支援事業」で3、「ソーシャルビジネス形成支援事業」で2、「災害支援事業」で4の資金分配団体が決定した。予算規模は総額で約30億円となっている。十分な準備期間がないまま拙速に資金を社会に流すことは不適切だと考えるが、2020年3月までに1年目の助成が随時開始されていくのだろう。

■休眠預金制度が持つ 市民社会へのリスク

休眠預金制度の持つ最大の問題点は、制度設計の未熟さや不透明さなどとは別のもっと本質的な部分に存在する。それは「社会的インパクト評価」で結果を可視化して事業評価すること、そして資金とともに「伴走支援」を行うことで、成果の最大化を目的としていることである。

課題に対応して生まれてくる社会的事業は、分かりやすく数値化できるものばかりではない。例えば厳しい状況にある子どもへの支援を行う団体の活動対象は、経済的理由で学習の機会が

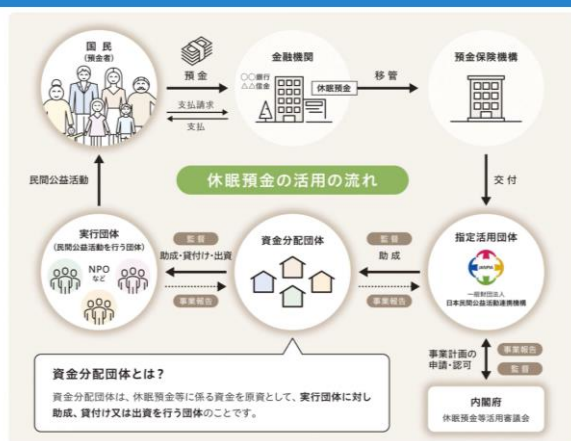
十分に持てない意欲のある子ども、家庭等が崩壊して大人や社会への信頼が破綻している子ども、ネグレクト等で生活に必要な習慣や知識を得ることがなかった子どもなど、さまざまである。当然だが、大人側が「心温まり」「支援しがいがあり」「分かりやすく成果を図ることができる」ケースばかりではない。しかしそれらの支援事業は社会的には等しく重要である。

ソーシャルビジネスは社会の中で大切な役割を持つが、NPOや市民社会はそれを含むもっと大きな概念である。個人的には、例えばある場面で民生委員が行ってきたような法律的にグレーゾーンになるかもしれない状況も活動対象に含むと考えている。そしてそれは、経済成長とは違う性質の社会的な仕組みとして、意識して存在させる必要があるのではないだろうか。

休眠預金制度が持っている危険性とは、結局のところ「合理性に基づく投資/リターンの市場原理」を資金の力を使って「不条理であっても倫理的であろうとする市民社会」へ過度に持ち込むことで、デリケートで人間的な市民社会の価値観が圧倒されてしまうことだと考えている。

未来バンクにも、そもそも政策の失敗である「奨学金制度」で苦しんでいる人たちの状況を改善するために休眠預金制度を活用できないかという議論がある。将来的に活用する機会があったとしても、以上のような問題意識を持ち、納得できる状況のもとで活用することが必要だろう。

休眠預金等活用の流れ



JANPIA「公募説明資料」より
<https://www.janpia.or.jp/koubo/>

2018年度定期総会を開催しました

未来バンクは、2019年9月28日に定期総会を開催しました。

全出資口数 2億282万1761口、出席口数（議長委任、その他委任を含む）1億2160万8163口、全体の60.0%で過半数を超えたため総会は成立し、また全議案について承認されたことをご報告します。

2019年度も、環境・市民事業・福祉に関して有用性の高い活動への事業融資、自然素材住宅の購入者に向けた住宅ローンのつなぎ融資または一部融資等を通して、組合員の皆さまからの出資金が、融資先、社会に対し、どう役立ち、活かされているのか、実感してもらえるよう精進してまいります。



総会後に参加者様と

<決議事項>

- ・議案第一号 2018年度事業報告・決算報告
- ・議案第二号 2019年度事業計画
- ・議案第三号 音信不通による組合員の脱退
- ・議案第四号 定款の変更
- ・議案第五号 役員の選出
- ・議案第六号 理事長および業務執行理事の選出

(役員体制)

理事長(再任)	田中 優 (執筆・講演業)
業務執行理事(再任)	佐藤 隆哉 (会社員)
理事(再任)	木村 瑞穂 (会社員)
理事(再任)	奥田 裕之 (団体勤務)
理事(再任)	岡田 純 (税理士)
理事(再任)	井上 あいみ (団体勤務)
理事(再任)	田中 悠輝 (団体勤務)
監事(新任)	吉田 達 (人材開発トレーナー)

(退任役員)

監事 加藤 俊也 (公認会計士)

未来バンクとは

市民が組合員となって出資していただいた資金を、環境・市民事業・福祉の目的に関して、市民やNPO団体・法人が起こす社会的有用性の高い事業や取り組みに対し「融資」という方法で支援することを目的に設立された、市民による市民のための非営利バンクです。出資者のみなさまの夢のこもったお金を通じて、想いと人をつなぎ、住みよい未来を育てていきます。

融資実績

融資累計件数：426件 融資累計額：約13億7千万円 (2020年1月時点)

融資の申し込みをご検討の方は、ウェブサイト内の「融資を受ける」をご覧ください。お問い合わせをお待ちしています。

<https://mirai-bank.org/loan/>



未来バンクの趣旨にご賛同いただける方は、出資をご検討ください。詳細はウェブサイト内の「出資・応援する」をご覧ください。

<https://mirai-bank.org/investment/>



編集後記

新しい年が始まりました。皆さんは今年の目標をたてたりしますか？私の目標は「本を12冊読むこと」です。最近は、「お金2.0 新しい経済のルールと生き方」「バビロン大富豪の教え お金と幸せを生み出す5つの黄金法則」「革命のファンファーレ 現代のお金と広告」など、お金に関する書籍が注目を集めています。新たなお金の価値観によって幸せや信頼を生み出す時代が、もうすぐそこまで来ている！気がしています。(佐藤)

未来バンクニュースレター 第3号

発行・編集：未来バンク事務局

発行日：2020年1月



未来バンク

MIRAI BANK

連絡先：〒132-0033

東京都江戸川区東小松川3-35-13-204

市民共同事務所「市民ファーム」内

TEL/ FAX : 03-3654-9188

HP : <https://mirai-bank.org/>

MAIL : info@mirai-bank.org